

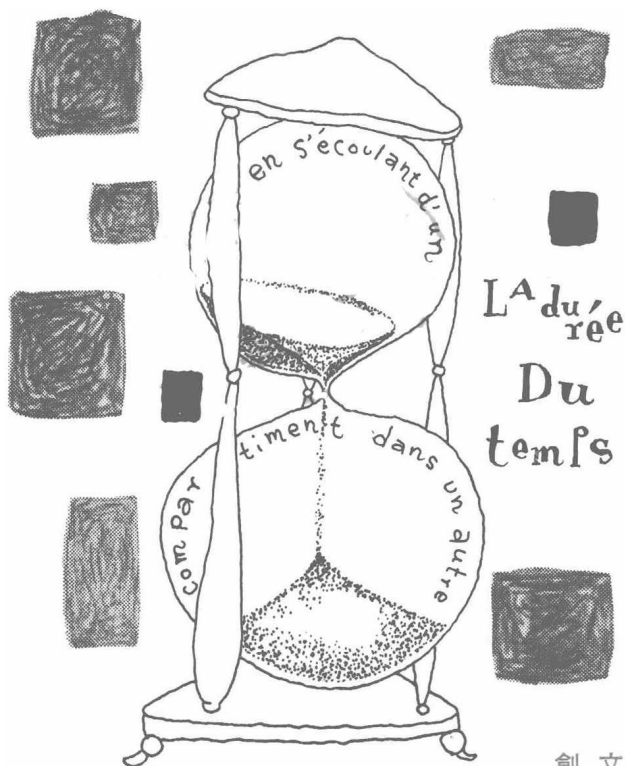
砂時計と寢言



分館

串田孫一 随想集

砂時計と寝言



創文社



砂時計と寢言

昭和 32 年 11 月 15 日發行

定價 250 圓

著 者 串 田 孫 一

三鷹市牟禮 911

發行者 久 保 井 理 津 男

東京 都 千 代 田 區 代 官 町 2
發行所 株式會社 創 文 社
電話 (23) 4008・振替東京 92472

落丁・亂丁本は取替ます 精興社印刷・橋本製本

砂時計と寝言
目

次

繪葉書	八
砂時計と寢言	一三
畫帳	一六
骨	二〇
太陽	二五
本の着物	三〇
夜の歌	三五
思い出の散歩道	四四
セルの着物	五一
消防自動車	五四
雪割草	六〇
マント	六六
東京港	六八

雨の雫	七四
白頭翁	七六
田植	八二
風鈴	八五
蚊帳	八八
雲の思ひ出	九一
荒小屋	九九
野分	一〇六
巢立つ日	一一〇
金蘭銀蘭	一二五
ふだん着	一二三
變なもの	一二八
猫と子供	一三二
新しい疼痛	一三五

雀

一三九

土曜日の午後

一四四

熱帯魚のおしやれ

一四九

柴田君の妹と四郎さん

一五五

山百合

一五八

珈琲

一六三

庭の夕食

一六六

天に近い住い

一六八

あとがき

一七一

装畫
著者

砂時計と寢言

繪
葉
書



繪葉書

繪葉書というものは、子供のころは夏休みなどにずいぶん澤山もらつたような気がするが、この頃はあまり届かない。たまに旅をしている友人が送つてくれるが、自分の知つてゐる場所にせよ、知らない場所にせよ、寫眞を見て勝手なことを考えるとたのしくて、私は好きだ。

この夏、天龍峽へ行つた時、宿の部屋にひとりでぼつんとしていると、急に二、三人の友だちに繪葉書で便りを出したくなり、宿の前の土産物を賣る店へ行つた。私の好みに合つたようなものはなかつたが、一組買つて來て、寢床にころがりながら書いた。

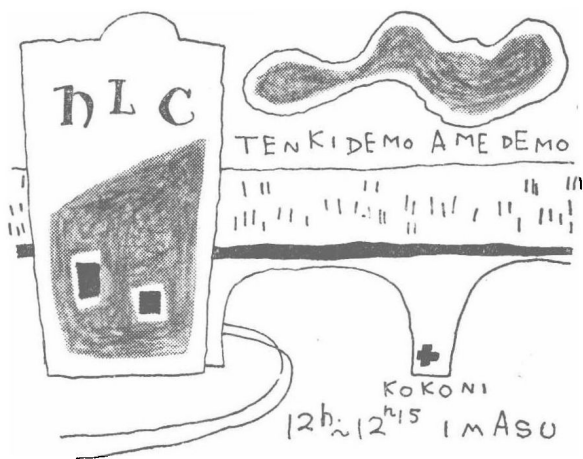
急に氣溫が降り、宿の人たちも寒がつてゐるような晩で、私は風呂にあた

まりに行くと、女中さんたちがごやごや入つていて、さすが部屋へ戻つて來たが、そんなことを葉書に書いた。そして書く前に、何枚かある繪葉書のうち、どれを誰に出そうかということと迷つた氣持が、變に幼いころの氣持を甦らせた。多分、正月に年賀狀を書く時に、買つて來た幾種類かの繪葉書を見ながら、これは受持の先生、これは従妹……という風に、繪とそれぞれの人の、私が想像する好みとをなるべく合わせていたそんな氣持が想い出されるのだつた。

私は昔、私製の繪葉書をよく出した。畫用紙を切り、また鳥の子の紙に丹念に繪をかい、それを何ということもなく投函するのが嬉しかつた。ずいぶん出したように思うけれど、どこかに一枚ぐらい残つていたら、取り戻して、額にでも入れてみたい。自分の過去のうちに、今になつて考えて、大層まめに、半藝術的な遊びをしていた時代があつたということは、一體いいことなのだろうか。今だつてそんなことをしたいと思うのに、のんびりとした根氣が持てない。

まだ大學に籍のあるO君という若い友だちがいるが、彼はそれをしている。

春先に、もくれんの蕾がふくらんだと言つてはそれを描いてよこすし、昨日の日曜日は小佛峠の方を歩いて來たと言つては、色彩のついた繪をくれる。そしてO君はこの夏、信州の方へ部屋を借りていて、頻りに、遊びに來ないかといつて來た。私はどうしても都合がつけられなくて、とうとう訪ねられなかつたけれど、一度、その附近の、大層おもしろい地圖を、やはり繪具だの色鉛筆だのを使つて、實に細かに書いて送つてくれた。この道は散歩にいいとか、この水はきれいだとか、この曲りかどから見える山はなかなかの姿だとか、つい私は擴大鏡を持つてしまうほどの細かい字で説明が書き込んであつた。そのなかでも、綠色にぬつたところに、「ここに坐つてお菓子を食べたらおいしいところ」と書いてあるのを讀んだ時、私は、バスケットだの、ウイスキー・ボンボンなどを買い込んで、さつそく出かけて行きたい氣になつた。そしてちよつと返事のかきようがなかつた。



私に自筆の繪葉書を下さる方があと二人いる。二人とも老人である。その一人のK氏は今、きのこに凝っていて、スケッチ・ブックをいつも持つていて、きのこの繪をかき、名前をしらべ、三ヶ月ほど前には九十二という番號がその繪のそばに書いてあつたから、もう百種類は越しているだろう。「北むきの窓の下、雨もりでなやんでいるところにととうこんなキノコが生えました」と言つて描いてあるき

のこが實に細かく、「所々透明な涙」とか「老人すがた」などという説明も、私にとつては嬉しい。

もう一人の老人は、忙しい毎日を送つて來た實業家であるが、かれこれ一年ほど前からお孫さんのクレパスで繪をかいてみたのが病みつきで、毎日出勤前に、水彩やクレパス畫を二、三枚ずつ描いている。その老人が、三日前の颯風の中でかいた葉書が届いた。黄緑にぬられた二つの丸いものは、どうも二十世紀らしい。そしてこんなことが書いてあつた。「いま大いに雨降る。私は雨の音を聞くと子供のときの運動會の前夜を思い出します。」

七十三のおじいさんに、ずっと昔の運動會の前夜を想い出させるのは、そこにあるとおり、雨の音にはちがいない。けれども、そんなことをふと私への葉書に書かせたのは、梨のようなものを二、三分、無心になつて描いたその氣持のひろがりだろう。

砂時計と寢言

三人の子供が去年のクリスマスの時に、砂時計をもらった。三分、十五分、二十分と大きさがいろいろあり、十五分のは風呂の水をくみ込むのに都合がいい。うちには電話がないので三分のピンク色の砂時計は、何に使うといいということもなく、それをもらった末の子はちよつとさびしい顔をした。

僕は別段この子を慰めるつもりはなかつたが、三分間の創作童話を二つ三つしてやると、その子もよろこんで自分で作り話をしていた。いま連續の放送で座談會をしているが、その時も時間を知らせるのに砂時計を使う。砂が落ち切るまでに話をまとめるので、そんなことから思いついたのであるが、僕はそれがたいそうおもしろくなつて、子供たちが寢てからこつそり自分の部屋へ砂時

計を持つて来て、三分間のおしやべりをする練習を始めた。何の構想も立てておかずに、思い出すことだの、頭に浮んで来る幻想をしやべるのである。

それはいかにもまとまりなく終ることもあるけれど、自分でもこれは痛快だと思ふようなことをいい出し、あとでそのことを書いてよろこんだりしている。自分の頭の中には何が入っているか、ほんとうに分らないものだと思つた。

そんなことを内しよで始めてから二、三日後、ゆうべの寢言は一體何です、幼稚なことをもそもそしやべつて……といわれ、僕はぎくつとした。ぎくつとするようなことは何もしていけないけれど、自分で知らないで、何をいい出すか分らないというのはやはり困る。それから二、三回寢言をいつたそうだが、これはどうも砂時計のせいとしか思われない。

ちよつと薄氣味の悪い想像だが、僕の頭のどこかに針で突いたような穴がある、そこから三分をひと區切りにして、いろいろな想いや創りごとがもれるようになってしまつた。僕は自分の寢言を聞いてみたいものである。